子どもの貧困対策としての学習支援

～もうひとつの、「ケア」が生まれる居場所～

PROFILE

松村 智史 まつむら さとし（東京都立大学人文科学研究科 博士研究員）

1983年、秋田県生まれ。東京大学大学院教育学研究科修了後、社会福祉、東日本大震災からの復興、子育て支援に関する業務等に従事。また、横浜市で生活困窮世帯の子どもの学習支援ボランティアを行う。2019年、首都大学東京(現:東京都立大学)人文科学研究科博士課程修了。博士(社会福祉学)。専門は、社会福祉学。著書に『子どもの貧困対策としての学習支援によるケアとレジリエンス――理論・政策・実証分析から』(明石書店)がある。

1 学習支援という、「ケア」の居場所

「学習支援」という言葉を聞いたとき、あなたは、何を想像しますか?

多くの方は、学校外で子どもに勉強のわからないところや宿題を教える場所、そんなイメージを持たれるのではないでしょうか。

もしかすると、塾や家庭教師のような学校外教育として、学力・成績の向上や、いわゆる受験対策に力を入れている場所を思い浮かべる方もいるかもしれません。

確かに、学習支援には、そうした側面もあります。特に、高校受験を控えた中学3年生や、その保護者は、学習支援の場に、そういった役割を期待する部分が大きいかもしれません。

言うまでもなく、受験や進学は、人生におけるひとつの重大事項であり、将来に少なくない影響を与えるものです。学習支援に、教科的な学習のサポートや、受験対策としての側面があることは事実ですし、利用者である子どもや保護者の多様で切実なニーズは最大限尊重し、応えるべきといえるでしょう。

しかし、ここで強調したいのは、学習支援のそうした側面は、あくまで学習支援のごく一部に過ぎないということです。むしろ、近年、多くの学習支援の場で、現場を支えるNPO職員など関係者たちの一定の共通認識となっているのは、教科的な学習のサポートや受験対策より、子どもにとって、学校でも家庭でもない、もうひとつの居場所としての学習支援の在り方こそが、重要であるということです。

ここで、居場所とは、物理的・空間的に身を置くという意味だけでなく、誰かが自分を気にかけてくれているという感覚や、他者とのつながりを感じることができる場所、という意味を含むものです。

こうした意味を帯びる学習支援の作用は、「ケア」と捉えることもできます。「ケア」というと、例えば、介護の

ように、身体的なサポートや、福祉的なイメージが先行するかもしれません。あるいは、子どもの教育・学習と、「ケア」の組み合わせは、聞き慣れないという方もいらっしゃるかもしれません。本誌の読者は、教育に関心がある方が多いと思いますので、そもそも、教育や学習を、福祉的なイメージとの親和性が強い「ケア」と捉えるという発想がピンとこないかもしれません。

しかし、「ケア」について長年研究が積み重ねられてきた社会福祉学や社会学では、「ケア」とは、身体的次元だけでなく、心理的次元を含むものと一般に理解されています。また、近年、支援の文脈で、「寄り添う」という言葉が福祉のみならず一般的に広く使われ、その重要性が指摘されるようになっています。誰かのそばにいたり、気にかけたりすること、それ自体がひとつの「ケア」として、社会的に認知され、浸透しつつあります。

学習支援の場で学習を通じたコミュニケーションをとったり、大学生やスタッフとの何気ない会話や、交流を通して、子どもたちが、誰かが自分を気にかけてくれているという感覚や、つながりを感じること自体が、実はひとつの「ケア」のかたちということができるのです。

換言すれば、学習支援は、そのような「ケア」が生まれる、学校でも家庭でもない、もうひとつの居場所ということができるのです。

では、学習支援をこのように考えた上で、子どもや、保護者にとって、学習支援はどのような意味を持つものといえるのでしょうか。

結論を先取りすれば、学習支援は、子どもと保護者にとって、ある意味では、受験や進学にとどまらず、その後の人生に大きな影響を与える可能性があると考えることができます。

次節以降では、それらの点について、順を追って、みていきましょう。

2 子どもたちが置かれた不利な状況

まず、学習支援を利用する子どもが置かれている状況について、みていきましょう。学習支援にいる子どもの多くは、貧困世帯の子どもたちです。子どもと貧困の関係や、貧困状態が子どもにもたらす影響などについては、「子どもの貧困」という言葉の普及により、ここ15年ほどの間にだいぶ知られるようになりました。

聞いたことがある方も多くいらっしゃると思いますが、貧困世帯の子どもは、自分では選択できない生まれ育つ世帯の貧困や生活困窮状態に起因する様々な不利・困難から、非常に多くの制約を受けることが、海外を含む様々な研究によって明らかにされています。

例えば、望むような教育を受けられなかったり、子どもの社会関係の多くを占める学校、友人関係、部活動、習い事に十分に参加できなかったり、経験を積むことが難しいと言われています。また、大学などの高等教育機関の進学率も、貧困ではない世帯と比べて低いものとなっています。さらに、自己肯定感や、将来の希望も低位にあるなど、子どものウェルビーイング（心身ともに健康的で、より良い状態）が、大きく脅かされています。

そのため、2000年代中盤以降、「子どもの貧困」の理解の普及とともに、その対策の必要性が高まり、2010年代には、「子どもの貧困対策の推進に関する法律」（通称：子どもの貧困対策法）や、取組の詳細を規定する内閣の「大綱」が成立するなど、子どもの貧困対策が少しずつ広がっています。

しかし、事態は、あまり改善しているとは言い難いです。例えば、2020年7月に厚生労働省が発表した「2019

年国民生活基礎調査」（厚生労働省 2020）によれば、貧困線（等価可処分所得の中央値の半分）に満たない家庭で暮らす18歳未満の割合を示す「子どもの貧困率」は、2018年の時点で13.5%に及びます。現代日本において、子どもの約7人に1人が貧困状態にあるのです。

こうした子どもたちが、多くの制約のもと、貧困世帯ではない世帯と比べて、様々な意味で、圧倒的に不利な状況にあることはご理解いただいたと思います。では、こうした背景を踏まえつつ、子どもの貧困対策として取組が進んでいる、生活困窮世帯の子どもの学習支援に関する調査と、そこから示唆される知見について、次節でみていきましょう。

3 子どもにとっての学習支援

まず、はじめに、「学習支援」の意味するところを確認すると、生活保護世帯を含む生活困窮世帯の子どもに無償で勉強を教える取組を指します。

多くは、民間の草の根レベルから徐々に広まった活動に起源を持ちますが、2015年にスタートした生活困窮者自立支援制度において任意事業として位置付けられ、それ以降、この制度に基づく取組と、それ以外の取組に大別されます。

さらに、2019 年度からは、生活困窮者自立支援制度に基づく取組は、「子どもの学習・生活支援事業」となり、世帯の生活支援や親の養育支援と連動した取組も広がっています。

では、こうした学習支援は、子どもに、どのような効果をもたらし得ることが、これまでの研究で指摘されているのでしょうか。

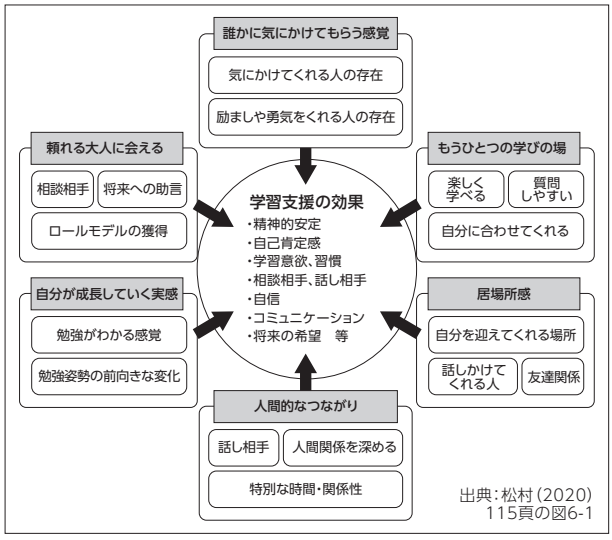
この点、まず、NPO法人さいたまユースサポートネット（2017）によると、学習支援を利用した中学生に、利用前後の変化を尋ねた調査結果として、参加後に、「学校の成績」、「家で学習する習慣」、「友だちとの仲の良さ」、「大人に対する印象」、「将来の進学に対する見通し」が、「とてもよくなった」あるいは「よくなった」と答えた割合が約5割に及んでいます。また、「自分に対する自信」についても、約3割の利用者が、「とてもよくなった」あるいは「よくなった」と回答しています。

次に、著者も参加した、首都圏の幾つかの学習支援を対象とした研究グループの調査では、学習支援で大学生やスタッフが、子どもの困りごとや悩みごとの相談に乗ったり、会話したり、ほめたり、気にかけたりするなどの、「ケア」が、自己肯定感など、子どもに多様な効果をもたらし得ることが示唆されました。

ここで、「ケア」とは、学習支援で、大学生やスタッフなど他者との会話、相談、経験などを通して、誰かが自分を気にかけてくれている感覚、気遣い、配慮を受けるといった、対人的なケアを意味します。

また、「学習支援によるケア」の作用として、インタビューデータ（語り）のカテゴリー化の結果、【誰かに気にかけてもらう感覚】、【頼れる大人に会える】、【自分が成長していく実感】、【人間的なつながり】、【もうひとつの学びの場】、【居場所感】という大きく6つの作用が確認されました。

こうした作用によって、例えば、学力・成績にとどまらず、自己肯定感など、より多元的に、子どものウェルビーイング（心身ともに健康的で、より良い状態）を高める可能性が見えてきました。



出典：松村（2020）115頁の図6-1

言い換えれば、学習支援において、大学生やスタッフから、学習支援を通じて、気にかけてもらったり、励ましや勇気をもらうことが、孤独感に苛まれたり、勉強を教えてくれる人の不在といった不利な状況を緩和し、自己肯定感などを回復する可能性を秘めているのです。

4 親・大学生への学習支援の影響

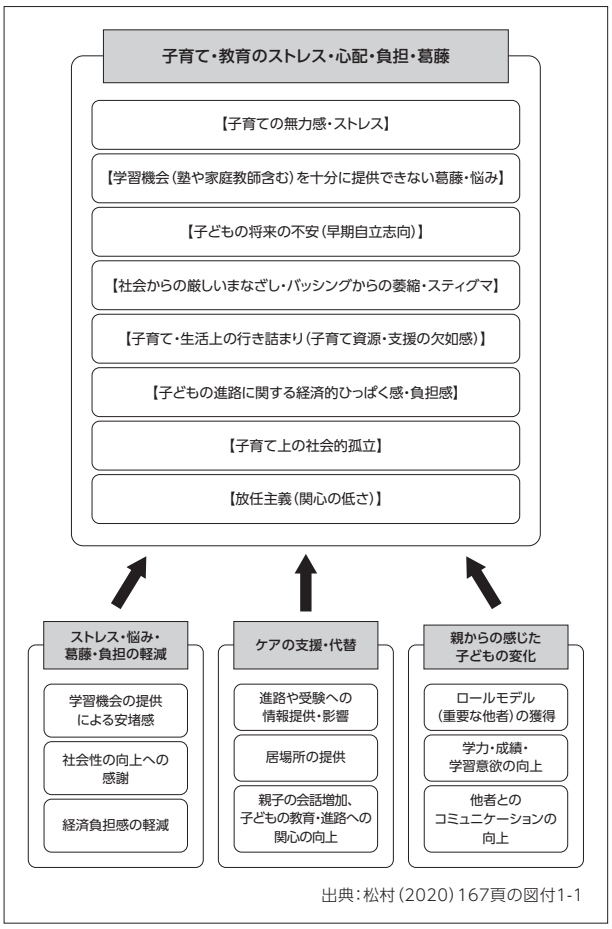
また、子どもが学習支援に参加することは、その親（保護者）にも影響を及ぼす可能性が指摘されています。

貧困世帯の親は、経済的制約にとどまらず、健康状態に不安を抱えていたり、あるいは、子どもを家庭に置いて外で働く時間が長いために、家庭で子どもをケアしたり、勉強を見たりすることが難しいと言われています。

さらに、親自身も、そうした厳しい状況に陥っていることに、自分の力不足、罪悪感、後ろめたさを感じながら、やれるだけのことをして、なんとか親としてのアイデンティティを維持しようとしているケースもあります。また、子育てについて、強いストレス、心配、負担、葛藤を感じているケースもみられます。

先述の著者も参加した研究グループが行った親へのインタビューを分析した結果、学習支援は、親に対して、まず、子どもへの学習支援を通した教科的な学習面のサポート、居場所やロールモデルの提供、さらに進路や受験に関する情報提供・相談など、客観的に、親の子育て上のケアを支援・補完する機能が確認されました。

さらに、子どもに学習機会やケアを提供したいという親の思いと符合することで、親としての役割を十分に果たせていない自責の思いの軽減、子どもに学習機会や居場所、気にかけてくれる仲間等ができたという安堵感や安心感の獲得といった、損なわれかけた親のアイデンティティをも支援・補完する作用が看取されました。



出典：松村（2020）167頁の図付1-1

ここまで述べてきたように、学習支援は、子どものみならず、親に対しても、多元的に有効に作用し得ることを示唆するものといえます。

さらに、学習支援をする側、ケアを提供する側の大学生にも一定の効果をもたらし得ることが指摘されています。多くの学習支援では、大学生が、有償/無償のボランティアとして参加しています。この点、著者が、学習支援に参加した大学生に行ったインタビュー調査によると、大学生の変化・学びとして、〈貧困家庭の子どもの見方が変わった〉、〈視野が広がった〉、〈貧困問題の関心が強くなった〉、〈相手を考えて話すようになった〉、〈自分自身の振り返り・相対化〉、〈市民意識の向上〉、〈教員志望の高まり〉、〈社会的企業への関心〉、〈子ども・次世代育成への関心〉という少なくとも9つのカテゴリーが抽出されました。学習支援でケアを担うなか、子どもとの相互作用において、こうした変化が、大学生に芽生えていること

が考えられます。

5 まとめにかえて

ここまで述べてきたように、教科的な学習のサポートや受験対策におさまらない、学習支援における「ケア」の重要性がご理解いただけたのではないかと思います。

その上で、強調したいのは、学習支援が持つこうした様々な可能性は、「ケア」から導かれ得るものであり、いわゆる受験予備校的な詰込みの教科指導の学習では、こうした作用は期待できないということです。

また、こうした学習支援がもたらすこうした変化は、もちろん、学校教育と相反するものや、矛盾するものではありません。

むしろ、子どもたちが主体的に、また、自信や安心感をもって、学校教育や、友人関係、活動に取り組むことの背中を押すものといえるでしょう。

本稿で紹介してきました知見を敷衍（ふえん）するならば、学校の内外に限らず、子どもへの日々の接し方・指導において、単なる教科指導であってはならず、ケアを意識した取組であることが、子どもにとって大切だと言えるでしょう。

ケアは、決して難しいことではありません。最初に申し上げたように、何気ない会話、相談などを通して、誰かが自分を気にかけてくれる感覚、気遣い、配慮を受けるといったことで十分なのです。

そして、そうしたケアの積み重ねが、多くの制約や不利な状況に置かれている貧困世帯の子ども、保護者、さらには、ケアを担う大学生にとっても大きな意味を持ち得るものです。

近年注目されているヤングケアラーの子どもなども一定数いることを踏まえると、子どもの学校生活・日常生活についての声に耳を傾けたり、困っていることや悩んでいることの相談に乗ったり、気にかけることが、一層強く求められていると言えます。

さらに、現在、ご存知の通り、コロナ禍において、貧困世帯の子どもや親の置かれている状況は、かつてないほどの厳しさを増しています。

学習支援の活動自体も、少なからず影響を受けています。しかし、貧困世帯の子どもや親が苦しい状況に置かれている今こそ、学習支援を通したケア、あるいは、学習支援にとどまらず、学校の内外で、ケアの灯を絶やさずに、紡ぎ続ける意義は、小さくないはずです。

あなたも、まずは、様子が気になる子どもに声をかけたり、話を聞いたりするところから、ケアの取組をはじめてみませんか。

ささやかであっても、あなたの声の積み重ねには、子どもや親の未来を大きく変える可能性があるはずです。

引用・参考文献

・松村智史（2020）『子どもの貧困対策としての学習支援によるケアとレジリエンス ――理論・政策・実証分析から』明石書店
・松村智史（2017）「生活困窮世帯の子どもの学習支援に参加する大学生ボランティアの学びに関する研究」『日本教育学会大会研究発表要項』,76,214-215. https://www.jstage.jst.go.jp/article/taikaip/76/0/76_214/_article/-char/ja/. 2021年5月22日.
・NPO法人さいたまユースサポートネット（2017）「子どもの学習支援事業の効果的な異分野連携と事業の効果検証に関する調査研究事業報告書」https://www.saitamayouthnet.org/pdf/報告書-web.pdf .2021年5月22日.
・厚生労働省（2020）「2019 年 国民生活基礎調査の概況」https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/14.pdf. 2021年5月22日.